

イアン・ゲートリー 著／黒川由美 訳

『通勤の社会史』

——毎日5億人が通勤する理由

稲垣 稜
(奈良大学文学部准教授)

本書は、香港で育ちイギリスの大学で学んだイギリス在住のジャーナリストによって書かれた書籍の邦訳である。交通の発達に関する書籍は数多く存在するが、それを通勤の観点からとらえ直し、なおかつ各時代の社会変化との関連を克明に記録したものは非常に珍しいのではないだろうか。序章において著者の通勤体験が述べられた後、3部（計14章）構成で多彩な考察がなされる。

「第1部 通勤の誕生と成長、そして勝利」では、各国における通勤の始まりと普及が論じられる。1章では、もともと貨物を運ぶためにイギリスで誕生した鉄道が、人を乗せる交通手段へと変化し本格的な通勤が始まっていく過程が記述される。2章では、環境の悪化したロンドンを脱出した人々の移住先である郊外住宅地について論じられ、鉄道や地下鉄の発達が郊外住宅地の拡大に寄与したことが明らかにされる。3章では、アメリカ合衆国やヨーロッパ大陸が取り上げられ、人種によって分離されていたアメリカ合衆国の鉄道の実態や、ヨーロッパ大陸において通勤の発達が遅れた背景・要因など、興味深い考察がなされる。4章では、自動車の登場から普及までの過程が論じられる。馬車輸送に取って代わる存在として自動車にかけられていた期待や、初期の自動車運転者の苦労などは、現代人には新鮮に映るであろう。アメリカ合衆国の自動車交通と郊外居住をテーマとした5章では、画一的で量産型の住宅地として知られたレヴィットタウンに象徴される郊外居住が、アメリカ合衆国のライフスタイルを大きく変え均質化していった様子が描かれる。イギリスに着目した6章では、鉄道の国有化、不採算路線の廃止、路面電車の廃止、自動車の普及など、



●イアン・ゲートリー ジャーナリスト。
●くろかわ・ゆみ 翻訳家。

●太田出版
2016年4月刊
B6判・352頁
本体2600円+税

第2次世界大戦後に生じた交通変化が年代順に論じられる。7章では、ヨーロッパ大陸、ソ連、アジアが取り上げられるが、特に、通勤が制約されてきた共産主義国において通勤が普及していくまでの記述からは、通勤という行為が、政治体制を反映したのもであることを認識させられる。

「第2部 粛々と通勤する人々」では、通勤の普及によって新たに生じた事態やそれへの対処が多面的に論じられる。通勤に悪影響を及ぼす混雑について考察した8章では、インドとともに通勤ラッシュの激しい国として日本が挙げられ、日本人がそれに耐えられる理由の一つとして、他人に接するときの伝統的な儀礼作法が文化的に根付いている点が挙げられているのは興味深い。「通勤中の攻撃性」を意味するロードレーズを考察した9章では、それが少ない国として日本が挙げられ、ここでも日本が古来の礼儀を実践していると評価される。10章では、「通勤は苦痛なのか」を検証し、実際には通勤に満足したり、好んで通勤している人々が多いことが明らかにされる。11章では、日常生活におけるさまざまな習慣を通勤が変えていったことが例示され、改めて通勤の影響力の大きさを感じ取れる。12章では、交通機関の職員による乗客の見方や扱い方、さらには運転手のストレス問題などが取り上げられており、この章を読めば、職員に対する見方も変わるはずである。

「第3部 顔を合わせる時間」は、通勤の未来に目を向けた論考である。13章では、通勤の解消につながるテレコミュニケーションについて論じられる。テレ

コミュニティ実現に貢献してきたはずのIT産業が、自らの従業員には通勤を推進しているという指摘は興味深い。最後の14章では、通勤や交通手段の将来について、過去の論者の未来予想を紹介しつつ、現在開発がすすめられている自動運転車の実現可能性が詳細に論じられる。

本書には、人間味あふれる通勤の姿が豊富に示されている。通勤者の感情が生き生きと描かれていたり、新たに登場する未知の交通機関に驚きや抵抗を示す各時代の批評や文学作品が紹介されている箇所を読む

と、通勤を単に労働力の需要・供給間の移動とみなしたり、地域間結合関係の指標とみなしたりすることの多い評者自身の研究スタイルを自省させられる。また、外国人の目で日本の通勤事情を客観的に考察した箇所からは、日本人の意識しない日本独自の通勤スタイルが存在することを実感させられる。交通や通勤に関心を持つ方はもちろん、通勤者自身にも一読を勧めたい。特に、通勤電車やバスの中で、他の通勤者や交通機関の職員を観察しつつ本書に目を通すことができれば、いっそう本書の面白みが増すであろう。